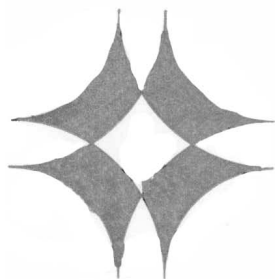


鈴木三重吉の研究

根本正義

鈴木三重吉の研究

根本正義



国文学研究叢書

明治書院

著者略歴

昭和17年、東京に生まれる。

昭和46年、立正大学大学院修士課程修了。

現在、東京学芸大学講師、大東文化大学講師。

大東文化大学第一高校講師。

著 書

「鈴木三重吉と『赤い鳥』」

「幼児教育のための児童文学」

「昭和児童文学論」

「昭和児童文学案内」等。



国文学研究叢書



鈴木三重吉の研究

定価 2,200円

昭和53年11月20日 印刷

昭和53年11月25日 発行

著 者 根本正義

発行者 株式会社明治書院

代表者 三樹彰

印刷者 精文堂印刷株式会社

代表者 西村弥満治

製本所 浦野製本



発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町 1-16

郵便番号 101

電話 東京 (03)292-3741(代)

振替口座 東京3-4991番

©1978 Masayoshi Nemoto

3391-24917-8305

目次

「赤い鳥」運動の組織者として	3
----------------------	---

——序にかえて——

『千鳥』論	35
-------------	----

処女作執筆までのこと	37
------------------	----

「花魁憂ひ式」の小説について	48
----------------------	----

『桑の実』論	71
--------------	----

私小説的要素について	73
------------------	----

その内容と構成について	89
-------------------	----

風景描写と色彩感覚について	113
---------------------	-----

「ぼッぽのお手帳」論……………	135
-----------------	-----

——愛の表白のなかの写生文——

作家としての資質を探る……………	153
------------------	-----

——結びにかえて——

鈴木三重吉年譜……………	189
--------------	-----

あとがき……………	203
-----------	-----

「赤い鳥」運動の組織者として

—序にかえて—

(一)

鈴木三重吉の文学者としての生活は、まさに二分することができる。それは、大正四年四月に『八の馬鹿』を雑誌「中央公論」に発表するまでと、文学者としての生涯を終えた昭和十一年六月の死までに区分される。『八の馬鹿』発表までの時期、つまり前半生は小説家としての生活であり、それ以後の半生は「赤い鳥」の編集者であり、童話作家としての生活であった。それを区分しているのが『八の馬鹿』という小説である。

ともかくも、鈴木三重吉の文学者としての生涯を考えた時、明治三十九年五月「ホトトギス」に發表された処女作『千鳥』に出發して、大正七年七月に創刊された童話と童謡の雑誌「赤い鳥」の編集・執筆・経営に後半生を捧げてその生涯を終えているのであるが、その『千鳥』を始めとする初期の作品と、童話と童謡の雑誌「赤い鳥」との間には、深い結びつきがあると私は考えている。

はじめに記したように、彼の生涯のうちの前半生は小説家としての生活であり、後半生は「赤い

鳥」の編集者・童話作家としての生活であった。とすると、鈴木三重吉がなぜ童話を書くようになったのか、という問題がでてくる。

この問題についてあえて私の結論を述べるならば、彼の芸術家としての本質的な要素が、文学者としての一生の中に流れていたのである、ということが童話を執筆した理由であると言えるはずだ。つまり、三重吉の児童文学観は、彼の小説のなかにも同じような要素で脈々と波うっていたのだと私は考えるわけである。それは一言で言えば文章表現の重要性であるといえる。

それが、児童文学というジャンルで童話を書くことによって精彩を放ったのではなからうか。このような三重吉の芸術家としての資質を解明することによって、彼の児童文学観が描きだせるのではなからうか。また、童話と童謡の雑誌「赤い鳥」の経営の内容についても明瞭になるはずである。それは「赤い鳥」運動の組織者としての鈴木三重吉を描くことにもつながるものであると私は考えている。

たとえば、野町てい子が『赤い鳥代表作集3 後期編』（与田準一他編 昭三八・五 小峰書店）のなかに『『赤い鳥』と私』という文章を書いている。その中で宮沢賢治の童話が鈴木三重吉の経営する、赤い鳥社に持ち込まれたが、賢治の童話は「赤い鳥」に掲載されなかったと記している。このような事実は、三重吉の童話に対する評価の基準を示したものであったと言えるはずである。

鈴木三重吉は大正五年十二月に春陽堂から、最初の童話集『湖水の女』を出版した。この童話集の「序」の中で次のような内容を記している。

この列冊を、第一に、すべての小さい人たちと、多くの婦人の方々とに捧げたい。

『湖水の女』はウエイルスの伝説、そのつぎの『馬鹿ぞろひ』と最後の『龍退治』とはイタリヤのお伽話、『二人出ろ』はロシアのお伽話で、みんな、もとの、そのまゝの筋を、私が話し直したのである。

私は、これまで世の中に出てゐる、多くのお伽話に対して、いつも少なからぬ不平を感じてゐた。たゞ話し方が話されてゐるといふのみで、いろいろの意味の上品なものが少くない。単に文章から言つても、ずるぶん投げやりな俗悪なものが多い。この点だけでも子供のために、いかににもがくしい気持がする。それから、材料そのものゝ選びかたにも、考へて足りないのが往々ある。

私はいろんな点に十分注意して書いたつもりである。文章としては、われゝが実さいに使つてゐるだけの、平易な純な口語のみを選んで、出来るだけ単純に書かうと努力した。

併し私は私でまた別の意味の欠点を沢山持つてゐないとも言へない。みなさんから、どんな小さいことを、も、一々注意していただいて、段々に悪いところを直して行きたいと思ふ。

最後に、表紙の画とさし画とのために多大な尽力をして下さる水島爾保布氏に、中心の感謝を捧げたい。

この「序」に述べられてゐるように「これまで世の中に出てゐる、多くのお伽話に対して、いつも少なからぬ不平を感じてゐた。たゞの話しが話されてゐるといふのみで、いろいろの意味の上品なものが少くない。単に文章から言つても、ずるぶん投げやりな俗悪なものが多い。この点だけでも子供の、ために、いかににもがくしい気持がする。」と書かれてゐるように、このような考えに立つて『湖水の女』を出版し、ここから三重吉の童話作家としての生活が始まるわけである。

大正六年四月に世界童話集の刊行を企画し、その第一編『黄金鳥』が春陽堂から出版された。大正

十五年八月には、第二十一編『象の鼻』が刊行されてこの童話集は完結した。世界童話集続刊中の大正七年七月、童話と童謡の雑誌「赤い鳥」を、童話と童謡を創作する最初の文学運動」というスローガンのもとに創刊したのである。昭和十一年六月の三重吉の死によってこの雑誌は終刊したが、鈴木三重吉の後半生はこの雑誌の編集・発行のみにあつた。事実、三重吉は「赤い鳥」の終刊まで、全く小説の筆を執らなかつたのである。しかし、昭和二年十二月二十八日付の小池恭にあてた手紙には、次のように記されている。

本日二月号刷り上り、ほつとしました。(中略)赤い鳥もこの一年半の間、毎日返品が多く部数も最盛時の $\frac{1}{2}$ にしたので、なほ $\frac{1}{2}$ 引き合はず、一円本の印税をあてにして、無利子の金を借りて苦しく突つ張つて来ました。円本で這入つた二万円近い金がつかり烟です、友人等は借金を払つたのを機会に断然廃刊しろと八釜しく言ひます、来年の六月号で満十年なのでともかくそれまで突つ張ることにし、高級の社員二名は一年分の俸給をくれて辞任させました。今は私と妻とほかに二名の社員とでやつて居ます、一月号などはいろ／＼の名前で私が五十二頁も書きました六月が来て、収支償へばつゞけますが、ダメなら廃刊です、もう日本に二度とあんな雑誌は生れませんが、残念なことです、よししたら再びヘッポコ小説をぐん／＼かきまくる決心です、友人たちはそれを望んで居ます。(『鈴木三重吉全集 第六卷』昭一三・一二)

この手紙に記されているように、「赤い鳥」が十周年を迎えようとしている時期に、三重吉は小説を創作することについての意欲を示しているのである。しかし、三重吉は小説の筆を執ることをその死までしなかつたのであつた。

雑誌「赤い鳥」は、この手紙から一年余のちの昭和四年三月に休刊してしまったのである。そして再び一年後の昭和六年一月に復刊したのである。この間三重吉は「赤い鳥」復刊の準備のために努力し、小説の筆は執らなかつたのである。本当に小説を書く気があつたのであろうか。あるいは、全くなかつたのかどうか。昭和五年五月十二日付の森田草平あての書簡をここに引用しよう。

顧みると、私は何のとりえもない愚小説ばかりかいて早くたびれた。十一年の赤い鳥社の仕事も泡沫の如し。君は最近に至り「輪廻」の大作を出したからエライよ。私は生活にも困る故、かけたら、又小説をかきたいが、階級意識やモダンガールの小説でなくては受けないとなれば私は何もかけない。思案中です。（『鈴木三重吉全集 第六巻』前出）

この書簡でも明らかなように、鈴木三重吉には小説を書く意志があつたのである。しかし、「階級意識やモダンガールの小説でなくては受けない」ということならば、三重吉には書けないということなのであつた。そして、結果的には「赤い鳥」の復刊を決意するのであつた。

「赤い鳥」の復刊を決意した最大の理由は、三重吉自身が昭和五年七月三日付の山田清吉にあてた書簡のなかで、「拝啓一月七日に御懇書を頂きましたが、私は肺炎で死にかゝつてゐましたので御返事も差上げませず失礼いたしました。五月まで就床、六月に入り、拾つた生命を再び赤い鳥に捧げる勇猛心を起しました。今度は必ずまとめます。御援助をお願いします。」（『鈴木三重吉全集 第六巻』前出）と記している。これこそ鈴木三重吉に「赤い鳥」の復刊を決意させた理由なのである。

確かに九死に一生を得たということは、重大なことであり、それが三重吉に「赤い鳥」の復刊を決意させたのであろう。しかし、「赤い鳥」の復刊による経済的ないきづまりは、目に見えていたはずである。五千人の会員への配布とは言っても数は限られているし、しかも予約購読者のみというのであるから大変である。創刊から休刊までの十一年間のうちで、休刊前の七年間はまさに苦闘の連続であったことを考えれば、復刊は冒険と言うよりほかに言いようがない。それに、大正三年十一月に創刊された「少年倶楽部」(講談社)は、昭和二年の時点で三十万部の発行をみているのである。このようなことを考えると、前途は多難であったわけだ。

こうしたなかでもかくも「赤い鳥」は復刊されたのであるが、会費の滞納あり借金ありで、復刊後の「赤い鳥」は細々と発行されていたのである。しかし、一方では三重吉の文学はすでにこの時、読者をとらえることができないというまでに小説界は変化していたのである。

鈴木三重吉は小説を書くことについては思案中であると、森田草平に手紙を書いた。けれども、彼にはこの書簡に書かれているような作品は書けなかったのである。「赤い鳥」の復刊は、生活のためばかりではなく、そうした状況が文学者三重吉を見重文学にかりたてた要因がそこにはあったはずである。それは何であつたのであろうか。三重吉は後半生を「赤い鳥」に全力投球している。二十余年にわたる「赤い鳥」の歴史のなかに、脈々と波打っていたもの、それはやはり小説家三重吉の文学者としての資質そのものであったと言えるのではなからうか。

「赤い鳥」の果たした役割は大きなものがあつたはずである。日本の児童文学史のうえでも重要な位置を占める「赤い鳥」ではあるが、その底に流れているのは、小説を書くことを捨て切れなかった、鈴木三重吉の作家としての資質であると私は考えているのである。「赤い鳥」の文学運動はその反映である。

「赤い鳥」の文学運動は、鈴木三重吉の文学観によって貫かれたといつても過言ではあるまい。三重吉の文学は『桑の実』という長編小説によって完成されつつあつたのである。その完成されつつあつた文学観こそ、まさに「赤い鳥」の文学運動の根幹ではなかつたか。当時の国語教科書が悪文であることを憂えたのも、子どもに与えるべき文学がないと述べたことも、当然鈴木三重吉の文学観による批評であつた。「赤い鳥」の復刊の事情も、それらの問題とのかかわりあいのなかで存在していたとも言えるのである。

それでは、「赤い鳥」の文学的運動の組織者としての鈴木三重吉の文学観はどのようなものであつたのであろうか。それは、まさに三重吉の文学が完成されつつあつた『桑の実』という小説のなかにそれを見ることができるのである。その点について明らかにすることがこの論稿の目的でもある。そうした観点から『桑の実』の分析を試み、作家としての鈴木三重吉の資質についても探ってみるつもりである。

ところで、鈴木三重吉は「赤い鳥」の創刊前に、小川未明に相談を持ちかけたことがあつた。これ

から創刊する児童雑誌の誌名を「赤い櫓」にしようと思うのだがどうだろうか、という相談であった。未明は「赤い」という語については異論はなかったが、「櫓」という語はむずかしいから「鳥」にしたほうがいいと三重吉に言ったというのは有名な話である。

(二)

さて、「赤い鳥」の組織者としての鈴木三重吉についてであるが、この本の『千鳥』および『桑の実』の論稿によって明らかにするつもりであるが、結論から言えば鈴木三重吉は叙情詩人的な小説家であったということが言えるはずである。いいかえれば、純粋な意味でのロマンチストであった。

このような要素が、大正期児童文学の中心的な思潮であった童心主義に結びついて「赤い鳥」が創刊され、初期においてその運動が成功をみせたといえるのではなからうか。北原白秋の童謡には、特にそうした童心主義の考えがはっきり現れているのである。

滑川道夫は『児童文学辞典』（白木茂他編 東京堂出版 昭四五・三）のなかで、童心主義について次のように記している。「おとなのなかにも内在する童心、子どもの心の純真さ、むじゃ気さなどに根ざした童話・童謡が強調された。極端な童心尊重は、美化し過大評価していわゆる『童心至上主義』の弊におちいった。」これが一般的な童心主義のとらえ方である。

このような童心主義の表れは、やはり、大正期のデモクラシーの流れのなかから生まれてきたもの

である。そして、「赤い鳥」は大正期児童文学のなかで、童心主義の中心的な存在であったといえよう。

「赤い鳥」の創刊は、三重吉の小説のいきづまりによる打開策の一つであったとか、長女ずずの誕生がその理由であるとか、さまざまに言われている。それについては、私なりの意見もあるが、いずれにしても「赤い鳥」の存在がこれほどまでに問題視されているということは、先に触れたように大正期デモクラシーの波にのって創刊された「赤い鳥」が、ある意味では大正期の中心的な存在であったということが言えるからである。

高山毅は『児童文学の展望―児童心理学Ⅱ』（日本児童文芸家協会編 角川書店〈新書〉昭三一・九）のなかで、「デモクラシーの思想は当然の成行きとして婦人の児童への関心を高め、初めて児童の解放が志向されるようになった。」というふうに記しているのである。

また、国分一太郎は『生活記録・児童文学』（未来社 昭三二・四）のなかで次のように述べている。

「赤い鳥」の文学運動は当時の封建的かつ非人間的な教育に対する反抗として出てきた。古くさい教訓の教育内容や学校唱歌やに反抗するものとして、こういうものに比較的反感をいだいている中流以上のインテリゲンチヤの少数に支持されながら出てきたのだ。

このような、高山毅・国分一太郎のとらえ方は大正期デモクラシーを背景にした、児童文学のありようを示したものである。とにかく、「赤い鳥」は文学と教育の結びつきによって生まれ、また「子

供は天使である。」「童心には階級がない。」という児童観に立った童心主義の思想のもとに多くの教師という読者をかかえて生まれたのであった。

鈴木三重吉は「赤い鳥」の創刊を考えた時、当時の大きな出版社である春陽堂に交渉したが、断られてしまった。そのため、五千人の予約読者ができたら、自分の書物の印税で「赤い鳥」を発行していかうとしたのである。そうして、大正七年七月の創刊号発行前に次のようなプリントを各方面に配布したのである。

童話と童謡
を創作する

鈴木三重吉

□私は、森林太郎、泉鏡花、高浜虚子、徳田秋声、島崎藤村、北原白秋、小川未明、小宮豊隆、野上白川、野上弥生子、有島生馬、芥川龍之介の諸氏を始め、現文壇の主要なる作家であり、又文章家としても現代第一流の名手として權威ある多数名家の賛同を得まして、世間の小さな人たちのために、芸術としつゝ眞価ある純麗な童話と童謡を創作する、最初の運動を起したいと思ひまして、月刊雑誌「赤い鳥」、を主宰発行することに致しました。

□實際どなたも、お子さん方の読み物には随分困つてお出でになるやうです。私たちも只今世間に行はれてゐる、少年少女の読物や雑誌の大部分は、その俗悪な表紙を見たばかりでも、決して子供に買つて与へる気にはなれません。かういふ本や雑誌の内容は飽くまで功利とセンセイショナルな刺戟と憂な哀傷とに充ちた下品なものだらけである上に、その書き表はし方も甚だ下卑てゐて、こんなものが直ぐに子供の品性や趣味や文章なりに影響するのかと思ふと、まことに、にが／＼しい感じがいたします。西洋人となつて、われ／＼日本人は哀れにも未だ嘗て、たゞの一人も子供のための芸術家を持つたことがありません。私もは、自分たちが子

供のときに、どんなものを読んで来たかを回想したゞけでも、われ／＼の子供のためには、立派な読物を作つてやりたくになります。又現在の子供が歌つてゐる唱歌なども、芸術家の目から見ると、実に低級な愚なものばかりです。次には単に作文のお手本としてのみでも、この「赤い鳥」全体の文章を提示したいと祈つてをります。何卒この運動に対して、みなさんから御高教と御助勢をいたゞきたく、折入つてお願ひ申します。

□就ては微力な私が、世の中の雑誌社流の出版するのは危険ですから、御賛成の方を五千名以上会員になつて戴いて、発行を確実にしたいと思ひます。どうか左記の各項を御覧の上、たとひお一人でも、お勧誘下さいますやうお願ひいたします。会員が五千名近くに達しませば、直に印刷にかゝります。御入会の方は三月上旬迄にお申込み下さいまし。会員用以外の残部少数の雑誌は、各地の書店へ配つて売らせる積りでをります。

□会費は東京市内及び近郊は一箇月十五銭。地方は十六銭、会員以外の方には一冊十八銭いたゞきます。お払込は雑誌が出来上つてからでよろしくございます。その時には振替用紙をお送りいたしますから、折返し御送金下さいまし。御入会の際には唯御住所とお名前を東京府下目白駅上屋敷鈴木三重吉宛御通知下されば沢山です。その序に、入会をお勧め下さつたお方のお名前を一緒にお知らせ下さいませば幸甚に存じます。これは私からそのお方へお礼を申し上げたいからでございます。

□雑誌は菊版八十頁前後の予定です。表紙と口絵二枚とは石版極彩色。さしゑ四箇。いづれも文展特選の洋画家清水良雄氏担当毎号の内容項目及び第一号の執筆者は次の通りです。

創作童話 島崎 藤村 世界童話 鈴木三重吉

創作童話 徳田 秋声 日本童話 秋庭 俊彦

創作童話 野上弥生子 西洋創作童話 有島 生馬

創作童話 芥川龍之介 懸賞創作童話 小宮 豊隆選

創作童話 鈴木三重吉 懸賞創作童話 北原 白秋選

創作童謡 泉 鏡花 各地童謡 北原 白秋選

創作童謡 北原 白秋 募集作文 鈴木三重吉選

創作童謡 小川 未明 会員消息 鈴木三重吉選

□巻末の募集作文は、これも私の雑誌の著しい特徴の一つにしたいと思ひます。世間の少年少女雑誌の投書欄の多くは、厭にこましくくれた、虫づの走るやうな人工的な文章ばかりで埋つてゐます。私たちは、こんな文章を見るくらゐ厭なことはありません。私は、少しも虚飾のない、真の意味で無邪気な純朴な文章ばかりを載せたいと思ひます。その材料はすべて会員乃至会員のお子さま方の作文又は会員が御推薦下さる作文（いづれも尋常小学から中学一年迄のもの）を私が選定補修して、一方に小さい人の文章の標準を与へると共に、一面では会員のお方全体の大きな家族的の樂しみを提供したいと存じます。どうか文章の長短に拘らず、空想で作つたものでなく、たゞ見た儘、聞いた儘、考へた儘を、素直に書いた文章を、続々お寄せ下さいますやうお願い致します。

□又会員消息といふ欄には、皆さん方のお子さまの御動静を広く記録したいと思ひます。どうかお子さん方の御成長を記念する一種の備忘録として此欄をお使ひになつて戴きたう存じます。例へば、口を聞きたてのお子さんのお言葉が段々に殖えて行くのを、月々纏めてお知らせ下さるなぞも、他人が拝見しても、一種の温い面白い味ひが得られると思ひます。以上の二つの点は、上記会費の低減と共に、会員のお方の御特權に属するわけでございます。子供には勿論選択の能力はありません。私は私の雑誌が、第一に大人のお方の推賞を得ることを熱望いたします。

□次に各地童謡、懸賞創作童謡（二十字詰二百行以下）童謡（長さ随意）の三つは、会員外からも偏く募集いたします。これにも、どうか御助勢下さいますやうお願いいたします。（「赤い鳥」鈴木三重吉追悼号 昭